

聞くことが出来る力

生

涯一教師を貫き、国語教育に多大な功績を残した大村はま先生の名言集『灯し続けることば』の中に、「熱心結構、いい人あたり前です」と言う一文がある。たった十四行ほどの短文なのだが、その中身は誠に重く深い。教師はただいい人ではだめ、子どもが将来ひとりで生きて行ける力を身に付ける為の、しっかりと教育方法や指導の技術を持つていなければならないと説いている。教科は勿論のこと、それはより良き人格形成についても同じである。

教

師は、分かる授業の展開に努めなければならない。子ども達が様々な知識を身に付けるために教師が存在するのだから、これもまた至極当然の話である。しかし、「面白い授業と分かる授業は混同され、或る子ども達や親達は、授業は面白くなくてはだめだと言って憚らない。しかし、毎時間そして毎日面白い授業が続くはずはない。なぜならば、不謹慎なことを言うようだが、子ども達にとって本来、授業は面白いものではないのだから。だからこそ、教師たるもの、日々分かる授業を目指して精進しなければならないのだ。

と

ところで、分かる授業に努めなければならないのは、なにも教師だけではない。生徒達も、その一端を担わなければならないのだ。つまり、授業にきちんとそして積極的に参加し、教師の話を良く聞いて分かる努力をしなければならない。禅語に「啐啄同時」というのがある。鶏の雛が孵化する時、雛が卵の中からコツコツと殻を突くことを「啐」と言い、親鳥がそれを助けて殻の外から突くのを「啄」と言う。この「啐」と「啄」が同時になされた時に、初めて良い雛が誕生するという譬えである。正に授業も「啐啄同時」をもって初めて成果が望めるのである。教師は分かる授業に腐心し、生徒は分かうと努力しなければならない。どちらか一方が欠けても、分かる授業は

成り立たない。しかし今の世の中、教師の分かる授業を声高に求めても、子ども達の分かる努力が置き去りにされている感が強い。

こ

園や保育園に早くから通い出す。まして母親が働いていたり、シンドルの場合などは、そうしなければ生活が立ちゆかないだろう。どのような条件で子どもが育てられたとしても、親は我が子を、小学校に入るまでにきちんと躾けなければならない。それが親としての基本的な責任であることは、昔も今も変わらない。その土台があつてこそ、初めて義務教育がスムーズにスタートできる。行動や態度、もの考え方を是正するには、やはり年齢が低いほど良く、小学、中学、高校と年齢が高くなるにつれて、是正は困難を極める。事によっては、命がけとすることもあり得る。

我

が家の宗派は日蓮宗である。唱題を行じる時、まずは「三宝礼」を唱える。この中に「平等大慧」と言う言葉が出てくる。「平等」とは、仏になることが平等であると言うことであり、親と子が、男と女等々は同じではなく、それぞれの違いを違いとして認識することが「大慧」であると教えられた。私は「平等大慧」の意味に合点した。今の世の中、平等という意味が大分違って使われている。教師も生徒も皆平等、思っていることは教師であれ誰にであれ、何でもはつきり言うことが正しいと、前後の見境もなく豪語した生徒もいた。

三

リオンセラ―阿川佐和子著の「聞く力」と内容は全く違うが、幼子のうちに目上の人達の言葉をしっかりと聞くことが出来る力を、子どもにつけて貰いたいと幼子を持つ親達に切望するのである。

(元青森県立北斗高校校長)